

ピーマンの疫病抵抗性台木の生育特性と接ぎ木技術

(野菜花き部・環境部)

1. 背景とねらい

近年、夏秋ピーマンの施設化に伴う連作により、高温期の萎ちょう性土壌病害が増加している。萎ちょう性土壌病害はこれまでの診断によると大半が疫病、青枯病であるが、いずれも難防除病害であり、生産現場では、防除対策として抵抗性台木を用いた接ぎ木栽培技術の確立に対する要望が強い。そこで、これまで報告されている台木についてその効果を検討したところ疫病に対する抵抗性が明らかとなったので、接ぎ木法と併せて指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

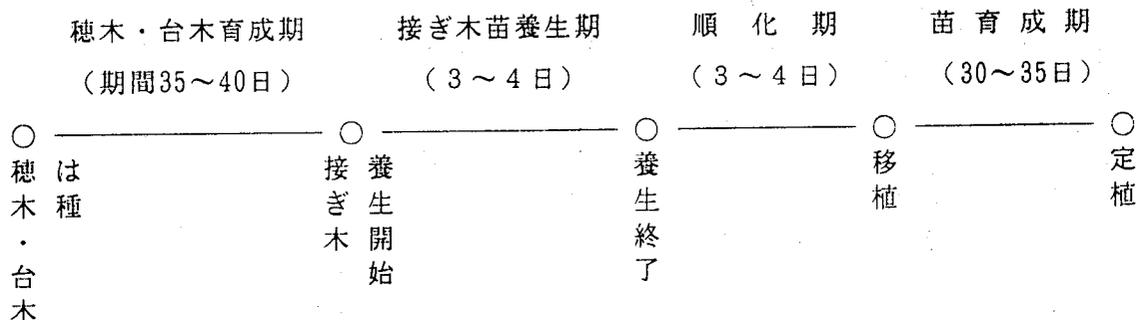
1) 疫病抵抗性台木と特性

品種名	疫病抵抗性	青枯病抵抗性	品質・収量
スケットC	◎	×	自根と同程度

◎：抵抗性が強い      ×：罹病性

2) 接ぎ木技術

ピーマンの幼苗接ぎ木苗の作出方法は次のとおりである。



ア. 穂木・台木は同日は種でよい。は種は72セルトレイに直接行う。

イ. 接ぎ木時の葉齢は、本葉4枚程度とする。

ウ. 接ぎ木位置は、穂木・台木とも子葉と本葉第1葉の間とし、専用チューブを利用した幼苗接ぎ木法(全農方式等)でよい。

エ. 養生条件は、温度25~30℃、湿度85~95%、照度3.0kluxとする。

オ. 養生期間は接ぎ木後4日間程度とし、5日目以降は通常の育苗管理とする。

### 3. 指導上の留意事項

#### 1) 疫病抵抗性台木の選定

ア. 「スケットC」は青枯病の抵抗性がない。また、現在青枯病に対して強い抵抗性を持つ台木品種は育成されていない。このことから、現地で接ぎ木栽培を導入する場合は病害を正確に診断した上で実施する。

病害の診断方法については、平成6年度指導上の参考事項「トマト萎ちょう性病害の簡易診断法」を参照のこと。

イ. 接ぎ木による生育及び収量性は、自根と同程度かやや劣る傾向にある。

#### 2) 接ぎ木技術

ア. 接ぎ木活着率を高めるため、養生施設の利用が前提となる。

イ. 接ぎ木苗は、接ぎ木から活着まで生育が一時的に停止する。このため、定植期や収穫開始期は自根栽培と同日播種では生育が5～7日遅れる。

### 4. 試験成績の概要

#### 接種試験結果

接種 菌株名	品種名	①LS279		②スケットC		③TPB		④京ゆたか(自根)	
		発病株率 <sup>1)</sup>	発病度 <sup>2)</sup>	発病株率	発病度	発病株率	発病度	発病株率	発病度
疫病菌		0	0	0	0	100	68.8	100	100
青	石鳥谷ピーマン	-	-	100	70.0	0	0	100	30.0
枯	高松トマト	-	-	100	100	50.0	20.0	100	65.0
病	土佐ピーマン	100	75.0	100	68.8	100	25.0	100	31.2

供試品種 穂木：京ゆたか

台木：LS279、スケットC、TPB

接種濃度 疫病： $3 \times 10^3$ 遊走子のう数/ml

青枯病： $2 \times 10^7$ cfu/ml

$$1) \text{発病株率} (\%) : \frac{\text{発病株数}}{\text{調査株数}} \times 100$$

$$2) \text{発病度} (\%) : \frac{\sum (\text{程度別発病株数} \times \text{指数}^{3)})}{\text{調査株数} \times 4} \times 100$$

- <sup>3)</sup> 指数
- 0 : 発病無し
  - 1 : 軽い萎ちょうが認められる
  - 2 : 草丈の1/3まで黄化落葉が認められる
  - 3 : 草丈1/3～2/3まで黄化落葉が認められる
  - 4 : 枯死